

「クリスマスの喜び」（ルカ二・八〜二〇）

1 すべての人を照らす

今日はクリスマス礼拝です。クリスマスとは、キリスト・マス、意味はキリストの祝祭、あるいはより正確にはキリストを礼拝するということです。

新約聖書の、とくにマタイによる福音書とルカによる福音書には、イエス・キリストの生誕のことが詳しく書いてあって、教会が当初からイエスの誕生を特別なことと見なし、大切にし、これを伝えようとしていたことが分かります。

ただそれを一二月のこの時期の出来事としてお祝いするようになったのは、キリスト教が古代ローマに広く普及するようになってからです。その頃ローマで盛んに行われていた冬至祭（異教の祭り）が、キリスト教の拡大とともに「義の太陽キリスト」の出現の祝祭へと変わっていったのです。人びとは光が戻ってくることに、まさに暗やみに輝く光としてのキリストの現れを見た。かくて救い主キリストは自然のサイクルに乗せられて人びとの生活に入り込んで行くこととなります。私どもの信仰のリズムは生活のリズムに重なっていったのです。

こうして福音書はみなイエスの生誕を光であるキリストの現れとしてとらえています。マタイによる福音書では星に導かれて東方の三博士が幼子イエスのところにやってきました。ルカによる福音書では、野宿していた羊飼いたちに、天から神の栄光の光が輝き、救い主イエスの誕生の知らせが天使によってもたらされます。ヨハネによる福音書では、キリストは暗やみの中に輝く光であり、「その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである」（一・九）と言われています。

この「すべての人を照らす」というヨハネによる福音書の言葉に今日をはじめに注意しておきたいと思えます。というのも、救い主は、特定の時に、特定の地ユダヤでお生まれになった。しかし、それは、決して、その時代、その地域の人たちだけの救い主ということではないからです。すべての人を照らす救い主。ここにおいでの方皆さんを、会員であるかないかを問わず、ここにおられない方もみな、これからの世代の人も、すべての人を照らす、闇の中にある人も、いなそのような中にある人をこそ照らす、それがキリストの光です。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」（ヨハネ三・一六）。この「世」とはすべての人のこと、したがって「世に来て、すべての人を照らす」この方こそキリストです。

このようにして照らされる世の「すべての人」の一人として、今日、聖書は、私どもの前に、羊飼いたちを指示しています。

羊飼いといっても、私どもはもちろん、今日ほとんどの人はじっさいその生活を知らないわけですが、聖書には二つの見方があることが確認されます。一方で羊飼いは由緒ある、むしろ高貴なといってもよい職業です。旧約の族長たちがそうです。ダビデは牧童の出です。「牧する」には「統治する」という意味もあります。神様もイスラエルの羊飼いと呼ばれています（詩二三・一）。イスラエルだけでなく近隣世界に

も羊飼いの純朴さには神が宿るといふ表現もあるそうです。しかし他方、彼らは貧しく、盗みを働きそうな信用できない人とも見なされていたようです。

ちよつと考えても彼らの仕事がきびしかったことは分かります。羊のために羊と同じところにいつもいなければならない。野外で、夜を徹して番をしなければならないのです。羊を守るといふことは、時には、身を賭して、命がけで羊を守ることもしなければならぬのです。

その彼らに、天使は現れます。スポーツの優勝者インタビュアーなどでよく、この喜びをだれに伝えたいですかというのがあります。家族であれ、先生や先輩であれ、心から一緒に喜んでくれる人が上げられます。神もまた羊飼いに伝えたいとお考えになられたのです。学者でもない、宮殿にいる人でもない。ここから一緒に喜んでくれる人たちとして彼らを見つけたのです。

2 恐れるな!

さてこの羊飼いたちをまったく突然主の栄光が明るく照らし出し、救い主の誕生の知らせが天使によって告げられます。

主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる」(八〇節)。

冬のパレスチナ、夜空は澄み切って、天には星が、降るように輝いていたに違いありません。しかしその光も遠く、辺りを覆う暗やみに打ち勝つほどのものではありません。闇の中で星は光っています。

その天の一角が真昼のように輝いて、羊飼いを照らしたのも、現れた天使が不思議なことを告げ、天使に天の大群が加わって賛美の歌声がひびいたのも、あるいは幻に過ぎなかったのでしょうか。一瞬の後、天の窓は閉まり、またもや世界は闇に閉ざされたのです。

この突然の輝きにどうして羊飼いたちは恐れずにいられたでしょうか。彼らは「ひじょうに恐れた」のです。それ以上ない恐れに彼らはとらえられた。先々週のアドベントの集いで、怖じ惑う羊飼いと羊たちの姿を、レンブラントのエツチングで一緒に見たことです。それは一切が白日のもとにさらされた、自分が神の前に隠れようもなく明らかにされる恐れです。

なるほど私どもには多くの恐れがあります。これから日本がどうなるか恐れているというようないささか高尚な(?)、しかし真剣な恐れもあるでしょう。日本の教会は一時期に比べて伝道がふるわず、これからどうなるのか、どこかでみな恐れています。日々の生活と人間関係の中で自分が受け入れられないのではないかと心の深いところで恐れをもつ多くの若い人がいます。古い、孤独、そして貧困や病気を恐れています。そしてだれもが死を恐れています。しかしこれらの恐れは、羊飼いたちが直面

した、神の前にさらされる恐れに比べれば、もしかしたら（簡単にいうべきでないとしても）軽いものであるかも知れないのです。真に恐れるべきものを恐れるなら、それらの恐れは解決できなくはない。恐れではなくなりうるということです。

しかし羊飼いたちのいだった恐れ、神に対し、私どもの存在が、その足下が揺すぶられる恐れ、毎日のあれやこれやの恐れゆえに私どもが忘れてしまいがちな神への恐れ、根本的な人間の恐れに対して、恐れるな、恐れる必要はないと、天使の声がひびきます。なぜでしょうか。

今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼う葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけているであろう。これがあなたがたへのしるしである（一一〜一二節）。

なぜ恐れなくてよいのか。神の前に私どもが隠しようもなく明らかにされても、その私どもを、神はそのまま受け入れてくださったからです。それゆえ恐れることはないのです。

どのように受け入れてくださったのか。こう考えたらどうでしょうか。イエス・キリストの誕生とは、一口でいえば、神が人となって生まれた、私どもの世界に入ってきた、入って来られたただけではない、「わたしたちのうちに宿った」（ヨハネ福音書一・一四、口語訳）ということです。神は私どもを愛し、受け入れ、ついには一つとなったのです。それゆえ私どものこの世は、そして私どもにも、もはや神なしではないということです。神が私どもの味方として立っていてくださるということです。イエス・キリストによって私どもはみな神なきところから救われたということです。いま飼う葉桶に、布にくるまわっている幼子イエス、この方こそが、神が私どもとともにいますことのしるしなのです。

3 証人としての羊飼

今日私どもに与えられた聖書箇所、ルカ二章八〜二〇節は、イエス生誕の物語であるとともに、羊飼いの物語でもあります。もとのテキストは八節でごく自然に「羊飼いたちがいた」とはじまり、彼らが、神をあがめ、賛美しながらまた元のところに帰っていったところで終わっています。

天使によってだれよりも早く羊飼いたちにイエス・キリストの誕生が啓示されたのは、彼らが、理解力も、人間力も優れていたからではない。救い主の誕生と一緒に喜んでくれる人たちとして神が彼らを見つけ出したのだということに先に申し上げました。そのことは、彼らが福音の証人となることも見越して、神が選んだといってもよいように思います。

天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムに行こう。主が知らせてくださったその出来事を見てこようではないか」と話し合った（一

五節)。

神の見込んだように彼らは主の証人となります。今日の聖書箇所、すなわち羊飼物語の後半は、福音の知らせのまとめ、あるいはその実り(ルター)を示しています。それは、一言でいえば、知らせを聞いた人々がイエス・キリストの証人になる、この方を自分の言葉と行いによって証しする、指し示す、伝達する者となるということです。

この(一五節以下の)後半で何回かくり返して使われている言葉があります。それは「出来事」という言葉です。「主が知らせてくださったその出来事」(一五節)とあります。「この幼子について天使が話してくれたこと」(一七節)、この「こと」と訳されているのが同じ出来事です。もう一つ、「マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて」(一九節)。出来事とは、そこに何かが起こることです。人の関与によらない、人間の作為によらない何かです。その起こったことの目撃者として、前線から後続部隊へ伝達する人が証人です。

この出来事に出会ったことが、羊飼いたちを旅立たせます。ベツレヘムに出かけて行った羊飼いは天使から言われてそうしたわけではない。なるほどお互いに「話し合った」ことはあります。話し合いの結果そうだったのではない。主が知らせてくださり語ってくださったことを信じて出かけて行ったのです。信じて神の言葉に固く立つことが彼らを証人としました。

羊飼いが伝えたこと、それは「民全体に与えられる大きな喜び」(一〇節)以外ではありませんでした。

自分たちにとつての、羊飼いである自分たちにとつての喜びだけではない。ユダヤの民すべての、ユダヤの民だけではない、はじめに申し上げたように世のすべての人びとにとつての大きな喜びのことでした。マリアの賛歌を思い起こしてもよいと思います。「主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める物を空腹のまま追いつ返されず」(一・五一以下)。これが神の国であるとすれば、そのしるしが、いま、人知れず、つましい姿でお生まれになった御子イエス・キリストにほかなりません。まるで飼葉桶のような私どもの汚れた世界、悩みの絶えない世界、悲しい世界、不安に満ちた世界、この世界に、私どもの生活の只中に、私どもの教会の只中に、私どもの家庭の只中に、何より私ども一人ひとりの中にまで、神はキリストとともに入ってきて、宿ってくださいました。いつも共にいてくださるためです。それがクリスマスの喜びです。

(二〇一八年二月三日)